

ザンビアの聴覚障害児教育

加藤 嘉文

(15-1, ザンビア, 養護, 和歌山県立和歌山ろう学校)

ろう学校の児童生徒たちに社会科をまだ満足に教えられていない私は、もっといろんな世界を知るべく、もっと楽しい社会科の授業を創れないかとずっと思い続けていた。これまでの社会科の学習指導は資料の内容がどんなに豊富でも、活字の学習のみで覚えるだけの機械的な学習にしか至らない。実際にその国へ行き、言語・文化・慣習などを学んで初めてその人たちの生活実態を知り、机上の資料ではみることのできない貴重な体験が、社会科学学習に大きく影響を及ぼし、指導する際に大きく寄与する。

職員室の机の上に、現職教員特別参加制度という資料を初めて目にし、これまでの自分が学校で何を教えてきたのだろうかと思ひ、外へ一歩踏み入れてみようと思ひ立った。教師生活7年を胸にし、ありのままの気持ちで面接試験に臨んだ。体力に自信がないのにアフリカ大陸のザンビアと決まるまで、はるか遠いアフリカ大陸というところまで考えていなかった。あまりにも驚き、さらなる不安が募り、協力隊員としてしっかり頑張ろうと決意を固めていたはずなのに、再び心が揺らぎ、躊躇していた。「世界の何処にいてもリスクは同じ。いい経験になるだろうから、行けよ。」という上司のことばが今でも忘れられない。そこまで言われた以上、協力隊としての活動を全うしなければならないという使命とプレッシャーを強く感じていたし、さらに私の場合は、聴覚に障害を抱えているため情報手段に限りがあり、緊急連絡に困るようなことがあった場合、どう対処していくべきかについても考えなければならなかった。何よりも現地の人たちとうまく付き合い、ともに楽しく生活できるように心がけていれば大丈夫だと確信を持ち、ザンビアへ向かった。

遥かなるアフリカ大陸のザンビアに着くと、すぐに1ヶ月間程の現地訓練が始まり、初日から緊張が高ぶっていた。一日中休むことなく、その訓練に集中していたし、環境の急変などで、体調を崩したが、何とかその訓練を終えた。任地はコッパーベルト州、銅資源が豊かで、大地が赤茶色で染まっている。首都ルサカから長距離バスで5時間行ったところの第二の都市キトウェで乗り換え、銅山が点在しているカルルシという町からさらに15キロ行ったところにセント・ジョゼフ教区（教会が開拓した村）がある。そこに配属先であるザンビア唯一の国立ろう教育センターがあり、その技術援助として係わってきた。センターの主な業務は、必要



写真1 パソコン指導

に応じて町へ行き、聴覚障害児の支援を行うが、件数がほとんどない。聴覚障害児の支援は病院、ろう学校あるいは聴覚障害児学級でも行えることができるからである。センターの業務のみではなく、その隣接にザンビアで一番大きいとされているセント・ジョゼフロウ学校においても中高等部にパソコンを指導し、翌年、中学部に数学も教えてきた。公用語は英語だが、その児童生徒たちと教員との間では、ほとんど手話を用いている。その手話は、ザンビア手話とアメリカ手話が混ざっており、これも習得しないと彼らとコミュニケーションすることができないのである。

赴任初日、それぞれの教室に入り、ザンビアに来る前に少し学んでおいたアメリカ手話で生徒たちの前で簡単に自己紹介をすると、彼らはとても喜んでいて。彼らは「加藤先生の手話名は？」と、私のそばに付き添ってくれた同僚に訊ね、「これはどう？（嘉文の頭文字はYなので、そのYの指文字を表し、ひじの内側に2回当てる）」とあって、彼らとともにいろいろと考え、「うん、そうしよう。」と1分もしないうちにすぐに決まった。彼らは、新しい人に出会うと、そのようにすぐに手話名をつけたがる。さらには、「加藤」という発音はザンビア人にとって覚えやすく、ベンバ語風に「カトー」を「カトンゴ」と付け加えるとまさにザンビア人の名前になるので、同僚や近所の間でお互いに笑い合い、こうして新しい名前を私にくれた。とても嬉しかった。

児童生徒たちともっといろんな話がしたくて、赴任当初から毎晩のように寄宿舎へ行き、彼らのする手話を真似ながら学び取っていった。そしてようやくその手話もできるようになり、時間を忘れるほど話に花を咲かせたり、勉強を教えてあげたりした。今想えば、毎日の彼らの会話がとても楽しかった。

ザンビアでは通常12年間の一貫教育が行われているが、第7学年と第9学年に進学するための統一試験が施され、最後に第12学年時に卒業試験がある。セント・ジョゼフロウ学校では、1年間の幼稚部が置かれており、12学年の内、学習のさらなる積み重ねのために第8学年時のみ2年間就学することになっている。従って、聴覚障害児が卒業するためには14年間就学しなければならない。セント・ジョゼフロウ学校はミッションスクールで、どの児童生徒にも教育の機会均等を与えてきているが、教室・寄宿舎が足りないほどで、学校に通えない児童生徒たちがまだたくさんいる。家族を失った児童生徒たちは教会によって支えられているが、第8学年から無償教育ではないので、親御さんや親族の方々は、苦勞して自分の子どものための教育費を工面している。さらには経済的事由で年齢差が大きく、学力はとても厳しい。何とかある程度成績を収めることができれば、短期大学に進学し、教員免許を取得し、母校に戻って教鞭を執ることができるが、ごくわずかであり、それ以外、何ら卒業後の進路保障がなく、福祉制度は全くない。そんな背景の下でありながら、彼らは懸命に普通の人たちと同じように生きているのである。

年末年始に一人の卒業生がセント・ジョゼフロウ学校に遊びに来た。すぐに仲良しになり、いろんな話に花を咲かせていた。彼は卒業生だから、ろう学校のことはよく知っているし、彼は首都ルサカに住んでおり、自宅の近くに自分で店を開いている。特に聴覚障害者にとってこうした社会の中で生きていくことが難しい境遇にあるのに、彼は違っていた。4月下旬

にターム休暇があるから、首都ルサカへ行くということを彼に告げ、彼と再び会える日を楽しみにしていた。

待ち遠しかったターム休暇が始まり、ようやくルサカに着いたのは夜の9時過ぎ。夜中に街中を徘徊するのは危険であるが、それでも彼は、ルサカのバス停で私が来るのをずっと待っていてくれた。そして、彼の家でしばらく過ごした。「君とこうして知り合え、親友になれて、僕はとても嬉しい。僕のこんな狭い部屋で日本人と一緒にになれるなんて夢だ。みんなに自慢できる。」といって、夜が明けるまで、ザンビアのろう学校のことや日本のことなど、いろんな話をした。彼を含めて3人（聴覚障害者）で店を上手に賄っている。日用品や雑貨、お菓子、パン、飲み物などを売っているが、お客さんとどうやって彼らとコミュニケーションしているのだろうかと思い、彼らの様子を伺ってみた。お客さんの口元、表情などを読み取り、お客さんにとって分かりやすい身振りで互いにコミュニケーションを解しているところがとても感心した。日ごろのコミュニケーションの積み重ねによって、そうした成果が現れるのでしょう。ザンビアのろう者協会やルサカ郊外にある聴覚障害児学級を見に行ったり、彼の友達の家や彼の親戚の家に訪れたり、覚えてたの手話やベンバ語で挨拶をすると、みんな喜んでくれた。友好的で親しみがあがり、家庭のぬくもりを感じ、日本のそれらと共通している部分が散見できた。

セント・ジョゼフロウ学校第8学年に一人の転校生が来た。普通校からで、難聴で手話ができなく、ずっと口話で生きてきたひ弱な少年。彼は、時々ホームシックにかかり、いつも家族を想う。「日本人が嫌い。」といって私を避けたり、反発したりしていた、ちょっと変わった少年だが、なぜか放っておけなかった。口げんかも多かったが、何とか興味をそそるような話題を持って彼に話しかけたり、冗談を言い合ったりしてきた。そんな彼も、次第に学校生活に慣れ、手話もできるようになり、みるみる明るくなっていた。私が、彼の教室をちらっと覗くと、「今は先生がいないので、どうぞ教室に入って僕たちに勉強を教えて下さい。」と彼は教室の入り口まで来て、私に丁寧にお辞儀をするので、賢い少年だなと思った。時間の許す限り、彼らに精一杯勉強を教えてきた。そんな少年がいたからこそ、同じクラスの生徒たちにも彼の影響を受け、どのクラスよりも明るい教室になっていった。

そのころ、私もザンビアでの生活にすっかり慣れていった。ここからさらなる本格的な仕事ができると思っていたのに、帰国もだんだんと迫っていた。彼はたまに私の家に遊びに来たり、私の家の掃除の手伝いもしてくれたりした。ついにセント・ジョゼフロウ学校を離れる日の前日にせまり、それぞれの教室を回って、別れの挨拶をしたが、特に彼の教室に入るのがとても辛かった。案の定、彼の教室に入ると、彼はなぜか教室の端に座って



写真2 第8学年

黙って下にうつむいていた。生徒一人ひとりに送る言葉をかけると、もうみんな泣いていた。最後に彼にいろんな思い出を語ってあげた。私もついに目が潤んでしまい、涙を堪えること

ができず、教室から出てしまったが、先生から呼び出され、またその教室に入り、もう二度と彼らと会えないと思うとますます苦しくなり、彼と泣きながら抱えた。

翌日、セント・ジョゼフ教区を離れ、首都ルサカで帰国の準備に取り掛かりながら、時間をみつけて、卒業生に何度か会えたが、あいにくお互いゆっくりしている間がなかった。

さらなる聴覚障害児教育の発展に貢献できるような活動は何一つできず、パソコンと数学の授業をなんとか消化していくという感じだけで終わってしまった。何より彼らと出会えた事で、生活していく上での不安をほぐし、こうして彼らから多くの友情を私にくれた。彼らには、聞こえないことで日本以上に不安や困難は多いのに、何とかなるだろうという気持ちで、心の寛大さが強く表れていた。教師や児童生徒たちの心が複雑になってきている昨今、機械的に教科を教えるだけではなく人間的にこうした心の教育を再度見直ししても、見直しすぎることはない。



Staff

Headmaster



Mr. Kalela Chileshe Alex

Deputy Headmaster



Mrs. Chilangwa Zillah Njobvu

Manager



Sr. Malama Kangwa Florence



*mantis
akakonkote*



Class Teachers



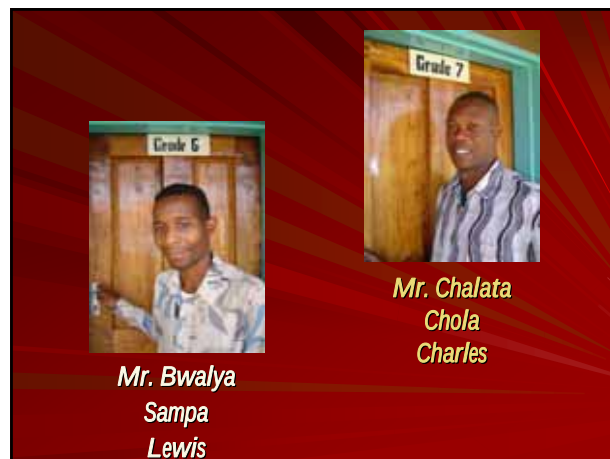
*Mr. Chanda
Evans*

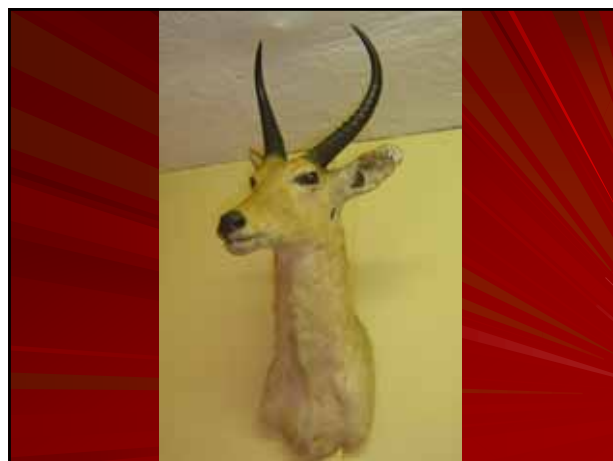


*Mr. Kamanga
Goodson*



*Mrs. Chilangwa
Zillah
Njobvu*







Mrs. Elizabeth



peacock



Workers



Mr. Joseph

Mr. Edson

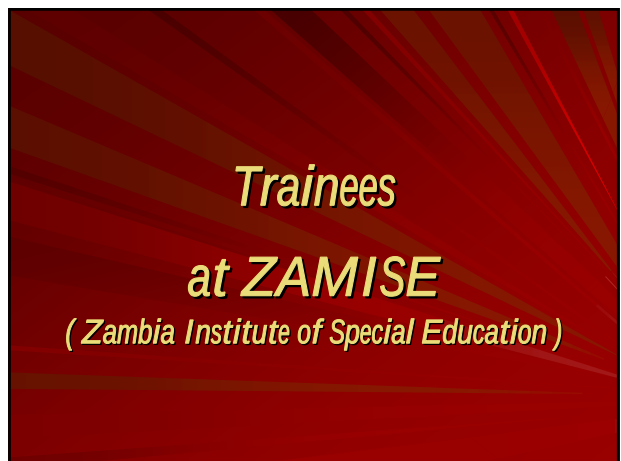
*Ms. Chilufya
Margaret*

*Mr. Bwalya
Charles*

*Mr. Chirwa
Severiano*



*red ants
impashi*



Trainees

at ZAMISE

(Zambia Institute of Special Education)



*Sr. Chabala
Mukonde
Angelina*



*Mr. Mulenga
Albert*



*chickens
ishikota na bamukolwe*

The former

Teachers

Ev. Laban Moses Sinyanga



*Mr. Ngoma
Paul*



*Ms. Nchimunya
Adrina*



*wild fruits
infungo*

Memories

These were the days







FIN.

*PRODUCER
YOSHIFUMI KATO*

*Japan Overseas Cooperation Volunteer
- JICA -*

Thank you for listening to me.

ザンビアにおける地理的背景・文化・生活 - 聴覚障害児の実態を中心に -

2006年1月7日

青年海外協力隊 現職参加

2つの事件：「人生にリスクはつきもの」

中央アフリカ・ザンビア

地理：首都、高原、サバナ、世界三大瀑布（ビクトリア滝）カリバダム

人口：1030万人（2002年）

言語：主にニャンジャ語、ベンバ語 * 公用語：イギリス英語

資源：銅・鉛・コバルト・亜鉛

貨幣：クワチャ 1 US\$ 3300クワチャ

現地訓練（一ヶ月間）：無線、携帯 一時退避勧告

病気：マラリア、ジンマシ、アメーバ赤痢、

猫に噛まれる？ 右太腿に化膿？ 急性胃炎？

国立ろう教育センター

場所：コッパーベルト州 / カルルシ / セント・ジョゼフ教区

創設：ノルウェー大使館（1996 - 1998）・教育省（1999 - 2004）

職員：センター長1名・手話教育2名・聴能訓練1名・技術援助（協力隊員）

機器：オーディオメーター・補聴器・パソコン・ビデオ・自動車

セント・ジョゼフロウ学校

創設：ルハンガ氏（1972年3月27日）

公費助成学校：政府75%、教会5%

教育費：約100 US\$

学年：幼稚部、グレード1/2/3/4/5/6/7、グレード8n/8r/9、グレード10/11/12

教員数：22名 + 協力隊員

児童生徒数：女子59名 / 男子75名 全体数134名

聴覚障害の原因：先天性53%、髄膜炎41%、耳下腺炎6%

補聴器装用児：なし

すべて手話で教育が施されている：アメリカ手話とザンビア手話が混ざっている

児童生徒・教員各々に手話名が付けられている

パソコン（G8-12）と数学（G8n/8r）を教える

- * 聴覚障害児学校及び学校在籍児童生徒数：G1-7 / 9820名（2003年）
- * 経済的な理由により未就学の子どもが多いといわれているが、どのくらいかは不明。
- * 他に首都ルサカやソルウェジ、リビングストーン、チョマなどの地域に聴覚障害児のためのクラスがあるが、12学年までのクラスを持つ学校はセント・ジョゼフロウ学校とルサカのムナリ聴覚障害児学級の2つのみである。
- * ザンビア聴覚障害者協会
- * ZAMISE（ザンビア特殊教育研究所） UNZA（ザンビア大学：障害児教育学部）
- * 南アフリカのケープタウンに聴覚障害者のための南アフリカろう短期大学がある。



01 Kitwe



02 open-pit in Chingola



03 Kalulushi



04 Kalumbwa



05 NRCEHI



06 STJSD



07 Mr.Ngoma's family



08 deaf teachers



09 NRCEHI



10 Head masters



11 farewell party



12 morning greeting



13 grade 12



14 sport day in Chingola



15 pupils



16 entertainment



17 independence day



18 aids day



19 graduation ceremony 2003



20 pupils



21 eating



22 tv room



23 deaf association



24 ZAMISE